

令和7年度 第7回

印西市総合教育会議

会議録

令和7年10月6日

令和7年度 第7回 印西市総合教育会議 会議録

日時：令和7年10月6日(月)

13時45分～15時20分

場所：印西市役所 大会議室

1. 開会

2. 市長あいさつ

3. 議題

(1) 印西市立小中学校の国際理解教育について

(2) 多様性の中で子どもたちが幸せに生きる力を育む教育とは？

～国際理解教育の新しい学びを考える～

講師：学校法人ユナイテッド・ワールド・カレッジ I S A K ジャパン

代表理事 小林 りん 様

(3) 教育現場で国際理解教育をどのように進めていくか

(ディスカッション)

4. 閉会

出席者(6名)

印西市長 藤代 健吾

印西市教育委員会 教育長 渡邊 義規

印西市教育委員会 教育長職務代理者 豊田 光弘

印西市教育委員会 委員 長尾 香奈

印西市教育委員会 委員 屋敷 毅

印西市教育委員会 委員 増田 洋子

講師

講師：学校法人ユナイテッド・ワールド・カレッジ I S A K ジャパン

代表理事 小林 りん 様

市長部局

副市長 野崎 崇正

企画財政部企画政策課長 武藤 誠

企画財政部企画政策課政策推進係長 藤代 悠子

教育部

教育委員会教育部長 伊藤 章

教育委員会教育部教育総務課長 鈴木 圭一

教育委員会教育部教育総務課総務係長 中野 竜一

教育委員会教育部学務課長 加藤 知己

教育委員会教育部指導課長 岡田 光靖

教育委員会教育部指導課副参事 深澤 淳一

教育委員会教育部指導課 指導係

教育委員会教育部教育センター所長 斉藤 睦雄

(午後 1 時 4 5 分)

企画政策課長
(進行)

それでは、ただいまから令和 7 年度第 7 回印西市総合教育会議を開会いたします。

会議につきましては、印西市総合教育会議設置要綱第 4 条の規定により、議長は藤代市長をお願いいたします。

藤代市長
(議長)

それでは、議長を務めさせていただきます。

今日ですけれども、多様性の中で子どもたちが幸せに生きる力を育むということで、国際社会ですね、これから私達の子どもたちがよりそのグローバル化された社会の中で生きていくという中であって、また世の中でどう生きていったらいいのか、というあたりについて皆さんと議論を深めていきたいと思います。

では、少し時間が押し気味ということですので、早速本題に入りまして、まず議題(1)、印西市立小中学校の国際理解教育についてということで、岡田指導課長からご説明をお願いします。

指導課長

はい。教育委員会指導課の岡田でございます。

私より印西市立小中学校における国際理解教育について少し駆け足でご説明をいたします。

ご説明の内容及び順番は画面の通りでございます。

初めに、国際理解教育についてです。

小中学校における国際理解教育とは、文化への理解と尊厳を深め、多様な価値観を持つ人々と共生できる態度や能力を育む教育を指します。

相互理解と尊重、自己文化の確立、主体的な行動力の育成、グローバルな視野の獲得といった観点が国際理解教育の目的となります。

次に、本市小中学校における実践例についてです。

①、外国語学習について。印西市においては英語の学習に取り組んでおります。小学校 3・4 年生では週 1 コマ、小学校 5・6 年生では週 2 コマ、中学校 1・2・3 年生では週 4 コマの授業を実施しています。

なお、一部の小学校においては、小学 1・2 年生で週 1 コマの授業を実施しております。このことについては、後程さらにご説明いたします。

②、国際交流について。これは海外の小中学生や外国人との交流を通じて異文化に触れる学習を指しています。

③、異文化理解について。これは諸外国の歴史や文化、生活や習慣などに触れる学習を指しています。

④、国際社会問題について。これは特定の国というわけではなく、広く世界を見渡しなが、平和や人権などグローバルな課題に触れる学習を指しています。

次に、国際理解教育に関係する教科についてです。

国際理解教育とは特定の教科学習を示すものではなく、外国語活動や外国語科を柱とし、教科の枠を超え、横断的に取り組んでおります。

先に申し上げました実践例の①から③については、主に外国語活動、外国語科の授業で行われています。

また、②から④については、社会科、音楽科、総合的な学習の時間、道徳科などで行われています。

次に、本市小中学校で取り組む、世界に羽ばたくグローバル人材育成プロジェクト（英語教育ビジョン）についてご説明いたします。詳しくは別紙のイメージ図をあわせてご覧ください。

このプロジェクトは学ぶ力を育て、外国語を使って主体的に思いや考えを発信する力のある児童生徒の育成を目指すものです。

横長の枠が4つありますが、下から順に小学1・2年生、小学3・4年生、小学5・6年生、中学生を示しています。右端に示しています赤い柱の円柱にあります通り、義務教育9年間の一貫した指導と英語力向上に向け、小中学校の連携を推進するとともに、本来は標準時数として扱われない小学1・2年生の英語学習を行うにあたり、文部科学大臣の指定を受け、教育課程特例校として特別の教育課程を編成し、小学1・2年生においても英語学習を実施しようというもので、緑色の3つの矢印のうち、真ん中の矢印がそれを表したものです。

小学1・2年生の英語学習の実施にあたっては、市内小中学校で教科指導に当たる教諭と英語教育コーディネーターを委員とした外国語教育検討委員会を定期に開催し、教材の作成、教員の研修の検討、小学校1・2年生の年間指導計画の作成などに取り組んでいます。

5、このプロジェクトを進めるため、印西市教育委員会の取り組みについてご説明いたします。

①、小学校には、授業支援をする英語教育コーディネーターを配置するとともに、全小中学校には授業補助する外国語指導助手ALTを配置しております。

なお、ALTについては、全小学校で1・2年生の英語活動を進めるにあたり、さらなる増員が必要です。

②、英語マスターとは、児童の英語によるコミュニケーション能力の向上と主体的な学習態度の育成をねらいとし、市独自で開発した英語コミュニケーション能力検定です。

対象は小学5・6年生で年2回、マスター級、スタンダード級、ベーシック級、と3段階にレベル設定された検定に挑戦できます。検定員はALTが務めています。

③、発達段階に応じてイングリッシュアカデミー、ホップ・ステップ・ジャンプを実施しています。

ホップの対象は小学3・4年生で英語を使ったゲームを楽しみ、ステップの対象は小学5・6年生で海外の児童と英語でオンライン交流を行うなど、ALTがコーディネートしたコミュニケーション活動を体験しています。ジャンプの対象は中学2・3年生でオーストラリアでの海外研修を行います。選考によって選抜された20名の生徒が現地で学校生活を送ったり、ホームステイをしたりなど、1週間英語漬けの生活を送ります。

④、訪日教育旅行の受け入れは県が所管しているもので、海外の同世代の児童生徒と学校で授業参加や昼食交流などを通して親睦を深めます。

令和7年度1学期は滝野中と原山小で、3学期には、いには野小と原山中で受け入れの予定があります。

⑤、A Iアプリの授業活用については、主に中学校での導入を計画し、全生徒を対象としたコミュニケーション能力の育成やオンライン交流を行うものです。

令和7年度は無料お試し版として試行実施しており、1学期は小林中と原山中で、インドネシアやフィリピンの中学生とオンライン交流事業を行いました。

2学期以降も、市内の各中学校の3年生で同様の交流事業を行う予定で、今後はその効果を検証しつつ、アプリの本格導入に向けた予算編成を目指しています。

最後に本市小中学校における課題についてご説明いたします。

課題1、本市全体において特筆すべき国際的な取り組みが薄く、国際理解教育を推進していく上でのパイプが少ないため、体系的な教材の不十分さや成功事例の不足などにより、授業実践に結びつかないことが挙げられます。

課題2、特に小学校においては、外国語活動、外国語科が実施されたことにより、英語学習＝国際理解教育といった誤解が生じていることもあります。

また、そもそも国際経験が豊かな教員ばかりではなく、一部の経験豊富な教員の知識や経験に頼らざるをえないというのが現状です。

課題3、外国語の運用能力を評価するための国際的共通基準C E F Rについて、中学3年生の目標値を千葉県では令和8年度までにA 1相当以上60%としています。令和6年度実施現在で本市中学3年生は56.5%という状況です。

以上、本市における小中学校の国際理解教育についてのご説明とさせていただきます。

藤代市長
(議長)

はい。ありがとうございます。

何か今の点について、質問等ある方はお願いします。

それでは長尾委員。

長尾委員

お話ありがとうございました。

小中学校の科目において、英語が外国語と記載されている理由について、そして、そこに準ずるのですが、外国語教育に関する方針を検討されている外国語教育検討委員会について、この構成メンバーはどのような方がいらっしゃるのか、基準や条件などがありましたら教えていただきたいです。

最後に、この委員会で決定された方針や内容について、ネイティブスピーカーの方による確認や助言などがありますでしょうか。

教えていただきたいと思います。
よろしくお願いします。

藤代市長
(議長)

はい、それでは指導課長。

指導課長

はい。初めに、外国語科と記載されている理由につきましては、文科省学習指導要領が外国語科となっております。

本市においては、その外国語科で英語を履修するということで、今、小中学校では学習しているのですが、他の小学校中学校、或いは他の地域では英語としていない地域もございます。

ですので、外国語＝英語ではなく、外国語科の中で英語学習をしているという意味での外国語科ということになります。

続きまして、外国語教育検討委員会、この構成メンバーですが、小学校の教諭が4名、英語教育コーディネーターが1名の計5名での構成となっております。

メンバーに選出する条件・基準等は、特別に設けていないですが、4人の教諭は、本市においても国際理解教育に大変注力されている先生方ということで選ばせていただいております。

委員会で決定されている内容については、ネイティブスピーカーのALT等の確認や助言を受けているところでございます。

以上でございます。

長尾委員

ありがとうございました。

藤代市長
(議長)

それでは、小林りんさんと繋がったようですので、お繋ぎいただいてもよろしいでしょうか。

改めまして、今日は大変お忙しい中、貴重なお時間をいただきまして本当にありがとうございます。

最初、私から少しだけ、イントロダクションでご紹介をさせていただいた後に、冒頭、りんさんの方から自己紹介であるとか、今の取り組みについて、これからあるべき学びの形等も踏まえながら少しお話いただけると幸いです。

すみません、普段りんさんと呼ばせていただいておりますので、このままりんさんで行かせていただきます。

ありがとうございます。

小林りんさんですけれども、教育に就かれている方々の中で非常に有名な方、それを超えて著名な方かと思います。

学校法人ユナイテッド・ワールド・カレッジ ISAK ジャパンの代表理事でいらっしゃいますけれども、インターナショナルスクールを軽井沢で経営をされているということですが、この場所での学びというのが私自身もすごく、刺激を受けていて、実は小林りんさんの著作って私も3冊4冊

ぐらい拝読をしたことがあります。

その中で、りんさんはチェンジメーカーという言い方をされていますけれども、いろいろな多様性がある社会の中で、どうやって子どもたちが自分らしく生きていって、その先にこの社会に変化をどう作っていくか、そういった学びを展開されている、本当に教育の先端を創られている方だと思っております。

印西市ですね、まだまだ多様性の中でどのように子どもたちが学んでいくかという、我々も本当に暗中模索のところですので、ぜひ今日、りんさんと様々な議論をさせていただく中で、これからの印西の教育のヒントをいただければと思っております。

それではりんさんお願いいたします。

小林氏

ありがとうございます。藤代さん、そして印西市の皆様、今日はありがとうございます。限られた時間ではあるのですが、逆に時間が限られているから分かること、私のプレゼンはすごく短くさせていただいて、逆に印西市さんからのご質問とかをいただきながら、十分に相互で色々ディスカッションができる時間を取らせていただきたいと思いますと思っております。よろしくお願いいたします。

では簡単に。実は背景に映っているのが私たちの学校の生徒なのですが、今、軽井沢の山の上に200人の高校生が、今年度は90の国々から来ておりまして、70%の生徒に奨学金を給付しているという、一風変わった学校でございます。

冒頭5分ほど頂戴して、プレゼンというかですね、資料をご覧いただいておりますでしょうか？これ全部やっていると時間がなくなってしまうので、まず学校の概要から少しだけお話しさせていただきます。

先ほどご紹介いただいた通り、チェンジメーカー、変革を起こす人の育成を建学の精神に掲げて、2014年に軽沢に開校した私学の高等学校でございます。

学校では、3つの力というものをチェンジメーカーの具体的な資質として大事にしたいなと思ってやっています。1つが先ほどからキーワードとして出てきている「多様性を生かす力」で、2つ目に「問いを立てる力」。ちょっと聞き慣れないかもしれないのですが、どうしてもこう問題解決能力とか、与えられた問いを解く、解決する力に今、フォーカスが当たりがちだと思うのですが、むしろ、そもそも何が解かれるべき問題なのかということを見出せる人というのが、これからますます重要になっていくのではないかなという思いで、12年前から学校経営に取り組んできております。

3つ目が「困難に挑む力」、どんなに多様な良い問いを立てられて、どんなに多様な良いチームを作れても、やはり何かを成し遂げるとか、何かを変えていくとかということには、困難がつき物ですので、そういったことをきちんと乗り越えていける人たちになってほしいな、というこの3つを掲げております。

繰り返しになりますが、今200名の高校生がおり（去年まで80数名の学校だったのですが）、今年は、90の国と地域から集まる全寮制の高等学校で、70%の生徒が、給付式の奨学金を得ているということと、それから実

はこれ皆さんから「財源どうしてるんですか」と言われるのですが、個人版ふるさと納税がほとんどの奨学金の原資になっています。そして最後に、卒業生の進路ですね。

「ここを出て、どこにみんな行くんですか？」と言われているのですが、国内外、8割ぐらいは海外の大学に進学していきます。多くの人が奨学金をいただいて、海外の大学に進学していきますが、いわゆる名門大学だけではなくて、芸術の道に進む人、それから起業する人、ギャップイヤーって海外では言うのですが、1年間大学に行く前に社会を見たいということで働いたりとか、海外でボランティアをしたりして、その後に大学進学を果たすという子なんかも含めて、進路も多様な選択肢が広がっている学校です。

これが最後のスライドになりますが、このユナイテッド・ワールド・カレッジ I S A K ジャパンという私たちの学校なのですが、この最初にある UWC というのが、実はもう70年以上前から活動している世界的な非営利教育組織でございまして、今、私たち日本を含めて18の国々に18校の拠点校があります。これに加えて、実は150の国々に生徒を募集するための拠点を擁しておりまして、私も実はそうなのですが、卒業生が世界各国でボランティアをしています。年間3,000人から4,000人のボランティアが150の国々で、生徒募集を行っておりまして、これがゆえにですね、私たちも軽井沢町にいながらにして、世界中の生徒さんからの募集応募をいただくことができるという仕組みになっている、という学校です。大変駆け足で簡単ではございますが、学校の概要だけお話をさせていただきました。

ありがとうございます。

ご事情とか色々伺いながら議論できればと思います。よろしく申し上げます。ありがとうございます。

藤代市長
(議長)

ありがとうございます。

すごいのが、奨学金を出されるために、このふるさと納税に多くの方々が応募してくださるというか、それはだからそれだけ I S A K の理念であるとか、小林りんさんのこの活動に共感されている方が多いということでもありますよね。

小林氏

本当にありがたいことですよね。私たち2012年から、実は奨学金のためにふるさと納税を軽井沢町さんにメニューを創設していただいて、皆様からご高配を賜っているのですが、2012年当時はこのような形で私学の奨学金に対して、1つの基礎自治体さんが、ふるさと納税を募集されるようなことはなかったので、そういう意味では軽井沢町さんのご尽力、ご助力は本当に大きいなと思って、今でも感謝いたしております。

藤代市長
(議長)

若干話がそれるのですが、コメントまでなのですが、この I S A K が1つ門を開いて、比較的長野県さんだといろんな私学の学校が非常に作りやすく設立したくなっているというのは1つ長野県の特徴なのかなと感じています。すごいなというのを感じている次第です。

小林氏

これも本当にひとえに県の皆様方、県庁さんだけではなく、私学審議会の皆様が新しい私学の創設に対して前向きと言うか、ご理解が深いということに起因しているのかなと思いますし、県内の私学関係者の皆様には、そういった意味でも大変お世話になってきております。

藤代市長
(議長)

ありがとうございます。

ここから、少し対話形式でいろいろとお伺いできればと思いますけれども、時間と形式もこういう形でもありますので、事前に教育委員の方々、また事務局含めて、どういったことを伺いたいかということを集約させていただいていますので、代表して私の方からお伺いさせていただければと思います。

まず1つ目です。先ほどもあった、「この問いを立てる力」、「多様性を生かす力」、「困難に挑む力」、ということで3つ挙げていただきましたけれども、実際にI S A K始め、世界の先進的な学びの場において、こういった力を育むためにどういった工夫であるとか、場づくりをされているのかという、そういった特徴についてご教示いただけると幸いです。

小林氏

ありがとうございます。

まず、「問いを立てる力」なんですが、これも実践がかなり大事だという風に思っております。これは実はI S A Kではなくって、各国のUWC校でもやられていることなのですが、私たち、カリキュラムのベースは国際バカロレアという、日本でも昨今、加盟校が、採用されてらっしゃる学校が増えているカリキュラムをベースにしているのですが、それに加えて、プロジェクトウィークという年に2週間、完全に学校を休んで生徒たちが自分でプロジェクトを作るという週間を設けております。私たちは具体的には、秋に1週間、それから春に1週間。で、その1週間、1週間のための準備期間とか、準備の時間も毎週金曜日に設けたりして、生徒とか自分が本当に何が、問題意識を持っていることなのだろうとか、何に1番情熱を感じているのだろうっていうことをこう形に落とせる、あるいは形に落とすこと、試みられる時間っていうのを作ってもらっています。なかなかやっぱり学校だともらったお題というか、課題を解くってことにフォーカスが当たりがちなのですが、まさにこの日本でも探究学習ってのはすごく広まりつつありますけれども、それをもっとこう授業の中でだけではなくて、社会課題とか自分のいる社会のコミュニティの課題とかに広げていくということを目指した実践なんかをしています。

たくさんやっぱり失敗する時間もすごく大事だなと思っていて、先ほどの「困難に挑む力」に多分関係してくるのですが。どうしても教育現場では失敗するとかわいそうだから、先に色々教えてあげたいっていう気持ちはある、あるし強いのは当然だと思うのですが、やはり実際の社会に出てみたら、誰かがずっと横で伴走してくれているわけではないので、何か自分で問いを立てるとか、プロジェクトを作るとか、新しいことを始める時には、つきものである困難とか失敗も、それも実践とか実体験を通しながらそれをその時にどうやって自分はどう1回態勢を立て直すのか、チームを立て直す

のかということもまた、実践を通して学んでいってもらい感じですかね。

で、1つだけ多分、「多様性を生かす力」、これはこのプロジェクトワークでも当然多様なスキル、能力とか多様な考え方を持った子たちと共働協業するという意味では、圧力だと思うのですが、「多様性を生かす力」だけはやはりですね、学校の仕組みというか、座組みにかなり関連するところがあるかなという風に思います。やはり、200人の生徒が80、90か国から来て、しかも全寮制で暮らしているのです、その中でも、もう多様性の中で、きれいな事だけじゃないですよ。多様性の中でぶつかることとか意見が違ふことだらけという日々を過ごしてくれているので、過ごしてもらっているというか、それを意図的にそういう環境を作っているのですけども、「多様性を生かす力」については、そういう多様な生徒をまず集めること、その彼らが、全寮制の中で同じ釜の飯を食うと、文字通りそれを通して学んでいることが多いかなという風に思っています。

藤代市長
(議長)

ありがとうございます。

やはり伺っていると、いろいろな子たちがいるような環境を作った上で、実際にその子たちが自ら問いを立てて実践していった、その中で、場合によって困難を克服していくという実践の場を作っていく、その「場づくり」がすごく大事なかなというふうに感じたのですけれども、何か、私たち教育に携わっていると、どうしてもこのリスク管理をしたくなってしまうので。先生方と話していても、踏み込んで子どもたちに挑戦をさせることは、すごく怖いなと思う瞬間があるのですけれども、この実践の場であるとか困難、失敗をさせるという時に、どういうことに気をつけられながらというか、すごく抽象的な話になるのですけども、どこまでだったら許容するのかとか、その辺りって、どのように設定をされているのか、もしよろしければ教えていただけると幸いです。

小林氏

はい。ありがとうございます。

逆に、変な話、プロジェクトとかは失敗したところでそんなに致命傷にはならないのだと思うのですよね。むしろ私たちはプロジェクトというのは成功したら、「あ、成功した、嬉しいな。もうちょっと大きいことができるかな」という成功体験も大事なのですが、失敗体験も同じぐらい大事だと思っているのです。失敗しても、まあそんな、転んだけどもちょっと膝小僧を擦りむいたかもしれないけれど、また立ち上がって歩いていけばいいということが分かることも実は同じぐらい大事だと思っています。なので、もちろんその物理的なリスク、怪我をすとか、人命に関わるようなリスクというのは、非常に極めて慎重になるべきだと思います。が、プロジェクトをやるとか、事業というか、学校の中で何か仕組みを作ってみた、それが失敗するとかってことは実世界でもあることなので、それは逆に若いうちに守られた安全な環境の中だからこそ、そういうことを疑似体験していくことは大事なんじゃないかな、と思っていて、プロジェクトが最終的に形にならなくてもいいと、発表会で発表できなくてもいいというぐらいの子たちで、先生、教員にはですね、我々はあくまでも伴走者であると、教育者というこの教えて育むというよりは、学問なので問いかけて、伴走する立場に

いるものということ、私も含めてですけれども、自分たちに聞かせてやっている感じですね。

藤代市長
(議長)

結構目からうろこだな、と多分我々会場にいる先生方も思ったのではないかなと。あえて失敗をさせてみるというのはありますよね。

私たちも常々学校というのは、社会の予行練習をする場というか、社会の縮図なのだろうなと思いながら場を作っているのですけれども、その中で社会に出て、失敗したらやはり大変なことが多いですけれども、学校って逆に言えば、失敗してもリスクがない中で挑戦ができる、すごく貴重な場なのだなというのを改めてすごく感じたところですね。

失敗させてもいいんだというマインドを持っているだけで、大分、先生方も、気持ちが楽になるのではないかなと、先生方が今横でうなずかれながら聞かれていました。

小林氏

そういう意味では、私、実は先生方は結構同じような考え方を元々は持ってらっしゃるのではないかなと思って、信じているんですね。

ただ、やはり昨今ですと保護者の方々とか、メディアの方々とか、いろんな世間の目というか、ご意見が渦巻いている中において、どうしても学校現場が委縮せざるを得なくなっている社会環境がかなり大きいのではないかなと思っています。ですので、これ軽井沢町も例外ではないなと思うんですね。で、学校現場の皆さんは一生懸命、いろんな子どもたちに体験させたいと思っているのが、みんなどこでも同じだと思っていて、で、それをやはり学校の先生方だけに責任を持っていただくのではなくって、地域全体で、「失敗してもいいんだよね」って保護者の方が言っていただければ、やはり学校現場でもそれがやりやすくなるっていうところもあると思っていて、これは一概に先生方だけの責任ではないっていうところが、かなり、特に公立は学校の場合はポイントじゃないかなという風に、私見ですが思っております。

藤代市長
(議長)

ありがとうございます。

この後の問いにも関係してくるところだと思うのですけれども、本当におっしゃる通りで、私も市長になってみて一番驚いたのが、本当に教育委員会の、特に指導主事と言われている先生方はここまで丁寧に保護者の方々にご対応されるのだなと、子どもたちに対応されるのだと、すごく思ったのですよね。

ただ、一方で、どうしてもその一人ひとりに負担が寄ってしまって、結局その先生方が、そういったものへの対応に追われてしまって、本来あるべき学びの時間、子どもたちの学びの環境をする場に時間を使えていなかったりというところは感じていまして、まさに、本来であれば、地域全体・保護者の方を巻き込んでというところでしょうけど、まずは、私たち教育委員会としても、さらには、市長部局としても、そういった先生方を守っていくような仕組みを作っていく必要があるのかなと、今お話を聞きながら改めて感じたところであります。

これに関係して、日本の公教育について少しお伺いしたいと思いまし

て。こういった学びの場をつくられている中で、横目に常々日本の公教育の現場というのが見えてくるのだと思うのですね。

さらに言えば I S A K 自身も 1 条校認定をされているわけなので、いわゆる日本の高校教育の枠内に、ある意味においては一部いらっしゃる中にあって、この日本の公教育、こういったものについての、りんさんなりの課題感であるとか、こういったことをもう少し良くしていったら良いのではないかということがあれば教えていただけると幸いです。

小林氏

はい、ありがとうございます。まず、いいところからだと思うのです。

実は、2 人こどもがおりまして、2 人とも軽井沢町立中部小学校というところに小学校はお世話になっていたのですね。やっぱり素晴らしいなと思うところが 2 つ、3 つあって、1 つはやはり、軽井沢だけではなくて全国的にだと思いますが、やはり日本のこのぐらいの規模において、O E C D 諸国の P I S A という国際テストがありますが、P I S A の点数なんかを見ても、このぐらいの人数の規模感で、あれだけこう安定的に、全体でいい点数を出していくというのは日本は本当に優れた教育システムがあるということの証だと思ってみえています。人数が多い中でもきちんとかなりの生徒さんに対して同じようなクオリティの質を担保してくというのは、なかなかできることではないと思うので、そういう意味では、日本の公教育は素晴らしい教育をしているという風に、みんなもっと誇りを持っていいのではないかなというのがまず 1 つです。

もう 1 つは、やはり日本の文化というか、作っているのは日本の学校なのだなと思うのですね。やっぱりお掃除の時間とか、給食の時間とかっていうのは、なかなか普通他の国だと自分たちでこう掃除するとか自分たちでランチを、給食を当番をすることになってなかなかないと思うのですけども、これをきちんとやっていることが、これだけの日本が本当にどこに行ってもあのゴミが落ちていない綺麗な日本を作り、お互いに上下関係なく、どんな役割の人でもきちんと感謝をしていくっていう気持ちを育てていくという意味では、日本の公立の小学校・中学校が育てている日本人というか日本の文化とか、慣習というのは素晴らしいものがあるのではないかなという風に思っています。私たちも、私のこどもたちも公立の小学校にお世話になって本当に良かったし、ありがたかったかなという風に思っています。多分その表裏一体というか、その裏返しというか、やはり後それをやろうと思うとある程度、みんなの、画一的という言葉が正しいかどうか分かりませんが、一定の法則に基づいて、一定の教育をしなければいけないっていう、それをしたからこそ、全体的なクオリティが担保されているっていうことがあると思うので、表裏一体だと思うのですね。全体の平均点が高いっていうことと、いろいろなこの多様なニーズに多様に対応しにくかった、これまでは多分表裏一体なんじゃないかなと思って見えています。で、やはりこの 5 年 10 年、不登校がこれだけ人数は増えてきているということは、やはりその多様化するこどもたちの人数や個性にもう少し学校現場として、寄り添っていくことをしていかないと、このままだと本当不登校が止まらない。不登校の増加が止まらないことは危惧していますので、繰り返しになりますけども、教育の多様性、多様な選択肢、多様なこどもたちの学びに寄り添うという努力

は、ますます必要になってくるのかなという風に思っています。

藤代市長
(議長)

ありがとうございます。

公教育のいいところって意外に見過ごされがちですけど、私の所感としてもなんか日本人ほど実務力が、国際社会の国際ビジネスの世界でもきっちりかっちり、ゴールから逆算して物事を組んでいって、さらに言うと個別の作業においてもすごくクオリティが高い人たちっていないのではないかなというのをすごく感じていて、この間、実はラグビーのプロリーグを見に行ったときに、そのリーグの専務理事の方とお話する機会があって、おっしゃっていたのが、ラグビー選手が海外からいらっしゃったときに、皆さん、こどもたちを日本の公教育の学校に通わせるらしいのですね。

この日本の良い文化というのですかね、掃除・給食の話であるとか、あとは勉強の話も含めて、非常にこんなに優れた教育はないって言い方をされていたので、何かそういう意味では、日本人とか日本の公教育のよさっていうのはもっと評価されてもいいのかなというのは感じたところですね。

その大人になった後の日本の公教育を受けた方々の強みを含めて、何かもう一段、りんさんの方で思われるところがあれば教えていただけると幸いです。

小林氏

そうですね。それでは、課題感とか、これから変えていけたらいいなと思う面は、先ほどのやっぱり多様性のところだと思うのですが。どうしても全体的な質を担保しようと思うとみんな同じように、同じこと、同じペースで、同じようにやってくことが良しとされてきたのだと思いますし、これまではそれで良かったのかもしれないと思うのですね。

ただこれからは、私よく申し上げているのですが、1つ変わっているねって日本語で言うところちょっとネガティブに聞こえると思うのですよね。「〇〇ちゃん変わっているね」みたいな。私もよく言われるのですが、でもその「変わっているね」が褒め言葉になる時代が来るといいなと思っていて、「変わっているね」＝「ユニークだね」ってことだと思うのですよね。その子が他の子とは必ずしも同じではないかもしれないけども、その子のユニークな良いところってどこなのだろうということをやっぱり見ていくってことが、これまた世界、先生方だけじゃなくて社会全体で必要になってくのではないかなと思うのですね。そしてやはり、学習指導要領は今まさに改定の議論が文科省でも進んでいますけれども、そこでも同じようにこういった多様な個性とか、多様な学びに寄り添うにはどうしたらいいのかっていうことは、国家的にも議論が進んでいるという風に理解しています。

なので、この風を捉えて、今までであったらなかなかちょっと一歩踏み出しにくかったなっていうことを現場の先生方が実践しやすくなってくのだと思うのですね。発達障害の方たちもそうですし、こどもたちもそうかもしれませんし、あるいは「あれ、この子ちょっとつまらなそうにしているな。分かりすぎてつまらなそうだな」っていう子にちょっと違うプリントを渡してあげるとか、本当、教室の中でちょっとした工夫で、たくさんの方が救わ

れていくのだと思うのですね。もちろん先生方、ご多忙でなかなかそこまでできない、余裕がない方も多いうのは重々承知しておりますけども、そういった教室の中でちょっとできる工夫、もう少しやりやすい、学習指導要領の改訂に伴って、制度上も許されるようになっていくと思いますし、それが学校現場でもできるようになってくという風に思いますよね。

藤代市長
(議長)

はたから日本の公教育の場とか先生方とか、教育委員会、指導要領等々も含めたものだと思うのですが、何かこの個別最適っていうか一人ひとりの個性に寄り添った、学びの場っていうのを作っていく上で、何か課題になっていそうなものっていうのは、どの辺りなんですかね。

全部がつながっているっていうことだと思うんですよ。すみません、少し問いが大きすぎて申し訳ないのですが。

小林氏

やはり教師の方々の多忙感を解決しないことには難しいのではないかなという風に思っています。これもOECDのデータで有名ですけども、日本の先生方というのは、諸外国に比べても学びに直結するもの以外に、事務作業ですとか、保護者の方々の対応とか、そういうところに時間を1番取られている先進国の1つだという風に国際データも示している通り、やはり日本の先生方って本当にご多忙だと思うのですね。で、これは事務作業が未だにデジタル化されていないってことにも関連していると思いますし、まずは、すでにもういっぱい忙しいのだと思うので、そこに新しい研修を入れるとか、「新しいことをやって」とお願いする前に、まずは、今の先生方の忙しさを軽減する施策を先行していただいて、時間とか気持ちの余裕ができて初めて、そこに「新しいことやってみよう」とか、「じゃあ、新しいこと、学んでみよう」ってこととかが可能になっていくのではないかなという風に思っています。軽井沢でも、こんな時間に電気がついているのだと思いながら、公立の小中学校の前を通ることが多いのですが、先生方本当にご苦労を、お察し申し上げますし、これもやっぱり地域みんなでやっていかなきゃいけないことなんじゃないかなという風に思いますよね。

藤代市長
(議長)

実はこの間、大日向小学校の久保先生にご登壇いただきまして、先生も近いようなことをおっしゃっていて、あそこの学校も週に1回、夕方の時間帯に必ず先生方が振り返りの研修のような場を持てるような、そんな座組にしていたりとか、そもそもあまり年間通して残業していることがないっていう言い方をされていたんですね。なので相当程度、先生方が学びに向き合う時間が確保されているのだと思うので、そういう意味では、本当におっしゃる通りだになっていうのを改めて感じたところであります。

小林氏

特に印西市さんの場合、学校数が多いじゃないですか。軽井沢の何倍もあるので、存じ上げずに申し上げているのですが、事務作業とかをどこかで一括して引き受けるとかってことができないのかなとか、事務効率、先生方もかなり軽井沢の事情しか、私は見ていないので分からないのですが

も、かなり細かなところまで先生方がやってらっしゃるなという印象を受けていて。それを自治体さんレベルで引き取れるところがあれば、効率化するとかっていうだけでも随分、実は変わってくるのかなってというのは、個人的には思ったりします。

藤代市長
(議長)

なるほど。

せっかくなので、まだ時間に若干、当初のタイムラインよりも余裕がありそうなので、教育長、今の点、何かありますか。

コメントとか、せっかくなので。

横にるのが渡邊教育長でして、私が就任した後にご就任いただいて、市内の中学校でずっと教えてくださっていた社会科の先生でもあるのですが、非常に生徒と保護者から愛されている、よき先生でもあります。

渡邊教育長

初めまして、渡邊と申します。

本日はありがとうございます。

今、先生から1つ、具体的なお提案といいますか、お話をいただいた、学校の事務の煩雑さを何とかというところで、行政も含めてどこかでまとめてできちゃうといいのかなということをお聞きして、なるほどなど。

今すぐ、じゃあこの部署でこれができるかなというところまでは私の頭の中でも整理はできないのですが、もう早速こういった1つの新たなお話いただけて、今日、後半もまた、すごく楽しみに先生のお話を伺いたいと思います。

ありがとうございます。

藤代市長
(議長)

昨日、市内のとあるイベントに出ていて、とあるママさんから言われたのが、今、校長先生方が草刈に、夏場は時間を取られるのですよ。

結構本格的な格好をして、みんな草刈を刈払機でやっているのですが、「あれどうにかならないの」、「他の方にはお願いできないの」という話なんかも（言われました）。渡邊教育長もそれをさんざんおっしゃっていましたもんね。

なので、今で言うと、現場の先生方が休まれたときに教頭先生が入っていかれて、結局、手が空いているのが校長先生しかいないから、草刈りにしても予算もないから、校長先生がやっていくっていう、何かそういう、よく考えたらありえないですけど、昔から私たちそれに慣れちゃっているんで、何かそれが当たり前に思ってきましたけど、やはりそれは違うのですよね。

渡邊教育長

自分もやるものだと思っていましたけれどもね。

藤代市長
(議長)

朝の時間帯にしても、やっぱり子どもたちが来てしまうので、始業時間前に先生方も来ざるをえないっていう環境もあったりして。これも少しシルバー人材センターの方々含めて、そういう方に入ってくださいとか。

りんさんのおっしゃる通りで、何かこの先生方が学びに向き合えてない時間が、非常に教育委員会の中も含めてすごく多いので。

今まさに市役所の方でも、改革プロジェクトを教育委員会、市長部局と一緒に進めていますけれども、まさにまずはそれからやらなきゃいけないんだなというのを改めて、すごく感じさせられたところであります。

小林氏

なんか今、地域の方々も、随分その学校とか、こどもたちに携わりたい、関わりたいという方が多いのではないかと思うので、それこそ、軽井沢町なんかみんなで神社の草刈りとか全員でやったりするのですが、地域のみんなでやったりできるといいなという風に思いますよね。

藤代市長
(議長)

これ、ちなみにこの先生方の多忙感を解消した上で、ですけれども、他に何か一人ひとりに向き合う上で、今すごくボトルネックになっているようなものって、どの辺りにあると思いますか。

この多忙感以外のところで。

小林氏

あの、それはやはり、いろいろな生徒の特性を学ぶということっていうのはすごく大事ななという風に思っています。

例えば、発達障害はようやく最近なって、数年ですけども、教職課程の中で、一コマは必修になるということになってきましたが、例えば、先ほどの今、文科省的には特定分野に特異な才能を持つこどもたちと呼ばれています、いわゆるギフテッドの子たちですよね。こういった子たちに関する特性とか特徴とか、まだまだご存知ない先生方が大半ではないかと、この国では、と思っていますので、そういったことについて学んだりとかすると、児童生徒が「どうしてあの子がこうなんだろう」というのはいろいろなことが見えてくるのだと思うのです。そういった、様々なこどもの特性、それをどう見分けるか、全部に対応できなくても「あ、この子はこうだから、今のこういう行動したのかな」という、こう分かるだけでも全然違うと思うのです。ですので、そういったこどもたちの特性を学ばれる、学ぶというか先生方に知っていただくのが大事ななと思います。

藤代市長
(議長)

一定の分野。なるほど。

今のことで、せっかくなので。指導課長、こういったいろいろな子たちがいるじゃないですか。発達障害の子たちもそうですし、あとは、不登校の子たちなんかも今増えているわけですけども、そういった子たちの状況とか、特性とかについて学ぶ場というのはどれくらい確保されているものなのですか。

例えば、私たちでいうと、実は（今年度の）2回目の総合教育会議、その時は不登校支援の専門家の方、30年来不登校支援、フリースクールを運営されている方に来ていただいて、なぜこどもたちが不登校になるのかということ、比較的最近の科学的なエビデンスも含めてご説明をいただいたのです。

それを聞くと、やっぱりそうなのだなと、すごく納得感があって、私た

ちの対応も変わっていくのではないかなという感じはしたのですが、実際そういう学びの場というのは、どれぐらい、先生たちに今確保されているのかというのを、可能であれば、岡田先生の方からご共有いただけると幸いです。

指導課長

まず、研修という部分で言いますと、学校では校内研修として、特別支援教育、発達のことであつたりについては、年数回研修を行っていると思います。

また、これは研修とは言えないかもしれませんが、ある問題を抱えたお子さんについて、関係職員が集まったりして、その子にどう関わっていったらいいかということは、ケース会議なんて言ったりするのですが。

その子その子に応じて、それはある意味、臨時的に集まって、いろいろ情報交換・情報共有をして、なかなか改善されないなんていうときには、外部の教育委員会の方だったり、県の北総教育事務所の担当者だったりという方にアドバイスをいただいたりしながら、そのお子さんの改善を試みようということ、比較的たくさんやっています。そういうお子さんがたくさんいるからたくさんやっているのかもしれませんが。

以上です。

藤代市長
(議長)

なにか教育長ありますか。

(小林氏発言) どうぞ、お願いします。

小林氏

発達障害のお子さんたちはもちろんそうなのですが、いわゆるその特定分野に特異な才能を持った子どもたちについては、多分若干実は似て非なる特性を持っていたりするのですよね。

で、この分野は、まだ専門家の方も少なく、我が国ですと、上越教育大学の角谷先生という女性の先生ですとか、愛媛大学の隅田先生、男性の先生ですが、この2人なんかはすごくこの分野では、10年、20年来研究されていらっしゃると思いますので、おそらくその発達障害にパッと見だと特性がちょっと似ていたりもするので、発達障害のことあるいはその特定分野に特異な才能を持った、誤解を恐れずに言うといわゆるギフテッドと呼ばれる子どもたちがどういう特性の違いがあるのかということは、もしかするとまだあまり周知が進んでいないかもしれないので、発達障害だけでなく、そちらのことも先生方に知っていただくと良いのではないかなという風に思うのですね。

で、これ、「そんなギフテッドの子なんかいないんじゃないか」という風に、この話をすると言われがちなのですが、実は、これしばらく前、2010年代の古いデータかもしれませんが、ベネッセ教育研究所さんが行われたアンケート、日本の小中学生数千名を対象にしたアンケートですと、特に小学校レベルでは、学校が好きではないということ、この理由を尋ねたところ、学校の勉強が分からないからという人は15%、分かりすぎてつまらないという人が12%いたのですよね。で、実は後者についてはかなり見過ごされている可能性が高いと思っていて、なぜならテストをやれば結構点数が良

いのですよね。なので、悩んでないと思われている。でも、学年が上に行けば行くほど、認知能力というのは開きがちなので、高学年ぐらいになるとこの子たちが不登校になったりする。

ということは、なかなか実は知られていないと思っていて、そういったものも含めて、どうしても発達障害の形に今フォーカスが当たる感じだと思うのですが、実はいろいろな特性の子がいるということを、幅広く先生方に知っていただくというのはあるのかなという風に思うのが1つと、あとは、先の元々のご質問、どんなことができますかという点、もう1つあるとすると、やっぱり先生方の中でちょっと違うことをやるとか、ちょっと新しいことをやることに対する、なんて言うのですかね、文化的なプレッシャーとか、「あんなことやってる」とか、「なんであの人は違うの」とか、「あそこのクラスだけずるい」とか、なんかいろいろなこうプレッシャー、先生方の中でも、もしかすると、あまり違うことをやりすぎない方がいいとか、他の人と同じことをきちんとやっている方が、なかなか指さされないとかっていう、万が一そういう文化があるとする、そこも結構実は、1つ考える必要があるところなのかなと思うのですよね。

というのも、やはり先生方が多様な考え方、多様な表現の仕方を実践されているからこそ、教室の中でも多様な学びが実現するのだと思うのですね。

ですので、やはり、まずは職員室の中から、教育委員会さんの中から多様な考え方とか、多様な意見が尊重されるような会議の仕方とかっていうことが広まっていくといいのかなと思います。

すみません。皆様のご事情をきちんと分からなくて、無責任な発言になっていたら恐縮なのですけども。

藤代市長
(議長)

ありがとうございます。

せっかくなので、一番現場に近い先生が、今日指導課の方にいらっしゃるので、その辺の人と違うことをやることに対するプレッシャーであるとか、答えづらいと思うのですけど。

なにか実際、新しいことをやろうと思ったときに、現場の方々はどう感じられているのかというのは、もしも何か、それをやるときのボトルネックとか、逆にこうしてくれるとやりやすいとか、こういう先生の下だったらやりやすかったなとか、何かあれば教えていただけると。

指導係

まず1つ目は、先ほどのギフテッドのお子さんの話があったのですけれども、私が以前働いていた学校で、ギフテッドの生徒さんがいらっしまして、やはりケース会議もその子のために何度も行ったりですとか、必要であれば、当時の校内支援教室を使っていたりということがありました。

まだまだ認知されてない部分もあるかなと思うのですけども、少しずつ広がっていくのではないかなと思っております。

2点目の他の先生とちょっと違うことをするとプレッシャーがあるのではないかというところを現場からなのですけれども。

今、教育委員会に入って、いろいろな事業を教育委員会の立場からする

ことにはなっているのですが、この時点でも、やっぱり現場からは「どうしてそういう事業をするんですか」とか、「どうしてこういうのがあるんですか」という思いが、現場には、あるなと思っているので、丁寧に説明をしていく必要があるなということを感じているのですが、もちろんそれは現場のときも同じで、学年の中ですとか、学校の中でちょっと違う行事の中で、こんなことをしてみようというのがあったときに、やはり、もともとあったものから離れたときに不安になる先生とかはいらっしゃるので、でもそれは反対されるだけじゃなくて、今までのものに思いがあったりですとか、変わっていくことへの不安というのはすごく大きいと思うので、お互いにやっぱりこういう多様性を理解し合うために教員同士も話を深めていくこと、理解し合うことは大事なかなと個人的に考えております。

藤代市長
(議長)

なんか答えづらい質問をしてしまって、すごく反省しているのですけど。

小林氏

すごく時代、タイミング的には、なんというか、期せずしてというか、全国的にどの自治体さんもそうだと思いますけど、こう昔ずっとM字カーブというかね、先生方の年齢が、ベテランの先生方と若い先生方が、こうM字カーブになっている。で、しかもその特にベテランの先生方がここから続々ともしくはそれになられていくかもしれないというただ中では、新しいことを、それはすごく現場の方々の負担感に繋がっているのはもちろんあると思いますが、よく見れば、新しいことをトライする好機にも転じることができるかもしれないと思うので、こう危機感と同時にそれを期待感というか、いいチャンスだと捉えて、やっていけるといいなと私自身も思います。

藤代市長
(議長)

ありがとうございます。

何か教育長ありますか、今の点は。教育行政を担う立場で。

渡邊教育長

まず、先ほどのいろいろな教員たちが特性を学ぶ、そういう必要性がというお話でしたけれども。

例えば、発達障害に関しては、昔の特殊教育というところから特別支援教育というふうになって、もう何年も経ちますけれども、やっぱりそこから非常に現場でいろいろなデータを蓄積して、発達障害に対する理解というのが現場の教員たちにも広がって行って、深まって行って、そんなことがあると思うのですね。

ですので、ギフテッドに関しても、テレビですとか、新聞等でも大分取り上げられるようになってきているので、我々としては、やはり現場の先生方にそういったことを学ぶ場を作る必要があるなというのを改めて思わせていただきました。

ありがとうございます。

あとは、新しいことにチャレンジというところですけども、これについても今若い人たちが増えてきています。

その中で、やっぱり何でもかんでも出てくる杭を打ってしまっっては、子どもたちのためにならない部分もありますので、そこにはどうしても、まずは管理職の理解というか、そんなところも大きくなっていくのかなと思いますので、その辺を市の教育委員会と管理職とで話していく場、時間というのも増やしていかなきゃいけないのかなというのを今感じました。

藤代市長
(議長)

ありがとうございます。

2つあって、伺って思ったのはこのギフテッドの話もそうだけれども、一時、発達障害の話がすごくメディア含めて、取り上げられていた時期があって、そのあとに現場での研修の時間も増えつつあったのかな、みたいな想像をされていて、その中で、その次に今来ているのが、おそらく不登校の子たちの話なのかなという感じがして。

向こう数年で大分この不登校分野、不登校の子たちの支援というところもかなり変わってくるのかなということは、私も感じているところですね。

その次に多分、ギフテッドというところが、最近ですよ。りんさんも、いろいろなメディアで発信をされ始められつつある中で、徐々に広がってきていると思うのですけれども、多分、その次ぐらいにギフテッドなのかなというのを何となく、今お話を伺っていて思ったところですね。

ただちょっと、いずれにしてもやっぱりこの研修の場というのをしっかりと、先生方に知っていただく場を作らなきゃいけないということはよくわかりましたので。

ちょっと来年度以降、今、予算作る時期ですので、反映をしたいなというのを改めて思いました。

あと先生方のプレッシャーというところと言うと、結局、多分、実際は校長先生だったりするのだと思うのですよね。うちの印西市の中にも日本で一番STEAM教育、データ教育で進んだ小学校がありまして、そこはやっぱり校長先生だったのですよね。

情報教育の先進校には指定はされていましたが、やはり校長先生が中心になって、新しい教育を取り入れられて、FLLっていうレゴブロックをロボティクスで動かすような、そんな競技で2年連続世界大会に挑戦をさせていただいて、今年の子達は世界の総合3位になったのですよ。

なので、それはすごく、やっぱりこの日本の公教育の可能性を感じたところでもあって、これ、きっちりかっちりものを進めていくというところに、自分たちで主体性を持ってクリエイティビティを持って挑んでいくという力が加わっていけば、私はまだまだこの日本の公教育が捨てたものじゃないと思っています。それをまさに可能性を示してくれたと思っていますのですけれども、ただその時にやっぱりポイントになっていたのが、そこは校長先生だったのですけれども、それをもう少し市全体に広めようとしたときに、やっぱり今、いろいろな課題を感じているところはあって、その時には私たち教育委員会の仕事って言うのですかね。

だから研修にしても、例えば、手を挙げた先生方がいろんな研修出られるようにしてみるとか、あとは実際に探究的な学びの時間を、例えば中学校なんかに行くと、単にその行事の準備のための時間にするのではなくて、探究の学びの時間に割り当てられている時間をちゃんと使えるように我々の方でしっかりと制度的に担保するであるとか、あとは、様々な教材を入れるときに少し、自由な予算をつけるとか、おそらく私たち、教育委員会であるとか市役所にもできることが多いのかなというのは、今話を聞いていて思ったところですね。

小林氏

1つだけ事例紹介というか、今おっしゃっていただいた通り、私も今、A S A Kとは別の団体でギフト協力、現場の活動に携わっているのですが、その関係で長野県内のいくつかの小中学校さんを回らせていただくことがあって、こういう風にやっているのだと思って驚いたことが1つあるのですが、個別の学校さんの名前出さずに、ある公立小学校さんなのですが、ある程度の規模になってくると教科担任の先生がクラス担任以外にいらっしゃる学校さんがあると思うのですが、教科担任の先生が開いているコマ、例えば理科の先生とか、算数の先生とか、英語の先生とか、その時にその教科がすごく得意な子にその先生が行くことを許可している学校さんとかがあって。で、やっぱり、探求学習の難しいところは全部の子どもたちがいろいろなことを探求していると、先生は誰をどうやって、やっぱりその専門知識がなかなかすごくないと全部に寄り添えないというところがあると思うのですが、教科担任の先生であれば、理科の先生が、1番得意だと思うので、その時間に例えばAちゃんは普通は図工をやっているのかもしれませんが、図工の先生にお願いをして、課題だけ出してもらって、それはお家でやることにして、理科の時間はその理科の教科担任の先生に普通の授業ではやらないような実験とかをさしてもらおうとやっていたりする、公立の小学校さんがされていたりするのですよね。で、それは算数・理科・英語かな、3教科やってらっしゃるとおっしゃっていましたが、公立でもここまで、やってらっしゃるところがあるのだなというのは私は思っていて、拝見していたのですが、そんな形でいくつか、すごく興味深い事例ができてきているので、そんなことを少しずつ発信できていければなと思いました。

藤代市長
(議長)

ありがとうございます。ちょっとここは、後程事例として研究ですね。

あと、10分ぐらいになってきたのですが、完全に論点がすごくテクニカルな話になってしまうので恐縮なのですが。

やっぱりこの英語力の話というところを、特に私たち日本の教育を受けている人たちは避けて通れないかなと思っていて、実際問題、今これだけ生成AIなんかも進化してきている一方で、でもやっぱり英語がより必要な社会が来るのだと思うのですけれども。

実際どの程度の英語力を、どういう形で身につけることが、最低限この国際社会で生きていく上で必要になってくるのか、お考えをお聞かせいた

だけると幸いです。

小林氏

はい。ありがとうございます。

私、決して言語の専門家ではないので、多分生成A Iの時代だからこそ、実は英語言語が操れるというのは重要になってくるのかもしれないと思っています。なぜかという、もちろんその対話を英語に翻訳してくれたりするというツールはどんどん発達していくと思うので、やり取りはかなり例えばね、こうやって日本語で話していても、それをその場で英語に訳してくれるとか、会議中もあったりするので、そういう面は随分改善していきますし、英語ができなくても海外の方と、あるいは英語話者の方々と会議できたりすることは増えてくるのだと思うのですね。

ただ一方で、やっぱり、生成A Iは皆さんご存知の通り、データを食べてそれを吐き出していると。それをそこそこたくさんのデータを、ビッグデータを食べてそれを吐き出しているという仕組みなので、それがやっぱり圧倒的に英語言語が多いのですよね。

なので、同じことを英語で聞くか日本語で聞くかは、食べているデータの量が違うというようなことを専門の方がおっしゃっていたりしたので。

逆に、英語はどんな分野にそのお子さんが活躍されるかによるかもしれませんが、英語でアクセスできる情報量が増えること、多いことは決してね、マイナスにはならないのではないかなという風に思っています。

その上で、じゃあ公立小学校での英語、小中学校での英語教育をどう考えるのかっていうご質問になってくるのではないかなと思うのですが、私が入室する数分前にA L Tのお話が多分あったように聞こえていたのですが、A L Tさんとかやっぱりネイティブの方々、10人、20人いらっしゃるのですかね。印西市さんだと。

藤代市長
(議長)

A L Tは13人だそうです。

小林氏

それはやはり規模が大きい自治体さんでいらっしゃるの、13人もいらっしゃるということであれば、A L Tの方をやっぱり、もうすごく活躍していただく場を設けてくってというのはすごく実は大事なのかなと思っています。

もちろんその教職免許を持っていらないので、これは自治体さんによるとは思いますけれども、全国的には、せっかくA L Tの方がいらっしゃっても、教壇に立っているのはあくまで日本の先生であって、A L Tの人は本当にちょこと呼んでネイティブな発音を聞かせてあげるだけみたいなこともかなり多いという風に聞こえてくるので、印西市さんがどうかって、私はちょっと存じ上げていませんけれども、A L Tの方がせっかく13人いらっしゃるのであれば、彼らにより活躍してもらえるといいのではないかなと思いますし。

あとは実際英語というのは英語を学ぶだけではなくて、何かを英語で学ぶってことはすごく実は1番効率的だと言われているのですよね。

ですので、英語「を」学ぶのではなくて、例えば体育を英語「で」学ぶと

か、音楽を英語「で」学ぶとかっていうことが、実は極めて効率的だという風に、言語という意味では効率的だと言われていて、例えばそういう分野で、英語が話せる方とか、ネイティブな方に入っていただくとか、ということが、例えば市の採用とかでできないかな、とかというのは、私の妄想レベルで恐縮ですけども思いました。

藤代市長
(議長)

これ極めて大事なことだなって、今、目からうろこだったんですけど、確かに言語を話すとか言語でコミュニケーションするって目的があるじゃないですか。目的があるからこそ、話そうとか聞こうっていうモチベーションがあるわけなので、そういうのは英語の授業って英語だけを学んで確実に。ハロー、ハワユ、みたいなこともいいのでしょうけど。

確かにおっしゃる通りだなって思いました。何かこのALTの方々が13人いるっていう時に、もう少しこういう形でお願いをするといいのではないかなと、もしアイデアなどがあれば教えていただけると幸いです。

小林氏

これ本当、ALTの方によるのですよね。地域特性が極めて強くって、どういった方々がALTに採用されているかによって、随分違うと思うので、教壇に立ったことが全くないようなALTの方は、もちろんいらっしゃるかもしれないので、なかなか一概にこういう風にしたい方がいいというのは申し上げにくいですが、可能であればやはり、こどもたちと接した経験がある人を中心的に採用できれば、ティーチングというか、日本語の先生、日本人の先生をちょっと出番を少なくさしていただいて、英語ネイティブの先生にもっと話していただく。で、それを、何かやりながら、私、軽井沢町さんの方では実は、アーティストだったのかな？アーティストの先生がたまたまALTでいらっしゃるって、アートを教わっていたのですよ。その先生から。すごく綺麗な作品をみんなで作ったりとかしていて、そうするとやっぱ自然に色とか入ってくるし、自然にその形とかも入ってくるし。それやっぱこうALTの先生の特徴とか特技とかを生かした、何か英語学習になると、挨拶だけにとどまらない英語が身につく可能性があるのかなと思います。

藤代市長
(議長)

なるほど。だからはめ込まないってことですよね。先生方を。

先生方もそれぞれ個性があるので、特にALTの先生方は、その方の特徴なんかを踏まえながらお願いすることを決めていった方が、いいのではないかなという、そういうことですよね。

ありがとうございます。

小林氏

はい。なんか英語楽しい、英語話したいって思ってくれることが多分小学校の方、1番だと思うのでまずは。

藤代市長
(議長)

ありがとうございます。

名残惜しいのですけれど、時間があと5分ぐらいにでするので、そろそろクロージングに行きたいと思います。

最初はりんさんからメッセージをと思ったのですが、先にちょっと教育

長と僕から今日の感想をお伝えさせていただいて、最後、りんさんにクロージングのメッセージをいただいて、このセッションを終えたいと思います。

では教育長の方から、まずお願いします。

渡邊教育長

はい。ありがとうございました。

冒頭の方で先生から、やっぱり失敗体験させることをすごく大事だってお話本当にその通りだなって思います。

ただ、それにはやはり、教員たちが失敗してもいいって思えるような余裕ゆとりがないと、そうはならない。

その分きちんと毎週研修の場も設けられていて、きとおっしゃるような伴走者である教員たちがいっぱいいてくれるのだろうなというふうに思っています。

非常に参考になりました。

また、先ほども話題になりました、教員の多忙感を解消していかないと、やはりどうしてもというところの中で、うまく事務的なところをまとめられる方法というのを考えていきたいなというふうにもまた思いました。

最後に生徒の特性を学ぶ機会というものを、新たにこちらでもよく煮詰めて、現場の先生たちに少しでもプラスになるような取り組みをしていきたいと思いました。

本当に今日はありがとうございました。

藤代市長
(議長)

続いて私からですけれども、本当に貴重な1時間だったなと、1時間のの中では本当にこれだけたくさんのことを学ばせていただいたなというのはすごく感じているところです。

1つ自信になったのが、今私たちが進めようとしていることというのは、やっぱり間違いじゃないのだなというのを感じたところです。

私たちはやっぱりこの先生方の可能性をすごく信じているところ教育の可能性を信じるところで、ただ一方で、先生方が前向きに働く上で、いろいろな足かせになっているものが多いと思っていて、それをまずは取っ払おうということを今、議論しているところだったのですね。

その先によりやく研修であるとか、新しいプログラム入れるということがあるのだろうっていう。この方向性はやっぱり間違いじゃないのだなということを改めて確信を持てました。

それに加えて、その通りだなと思ったことが、本当にたくさんあってですね、それこそ挫折の場をあえて作るっていうことがこどもたちにとって、社会に出てから実は大事なのだということであるとか。

特性の話もそうですよね。あとはALTの方も含めた英語教育とどう向き合っていくのかっていうことについても、今までなかなか私たちから出てこないようなアイデアをたくさんいただいて、私たちとても本当にありがたい機会だったなと思っております。

こどもたちは地域の宝ですので、しっかりと今回いただいたお話を踏まえて教育ビジョンを作って、日本で一番の、世界で一番の公教育を作っていきたいと改めて思いました。

今日はありがとうございました。

最後にりんさんお願いします。

小林氏

なんだか、あっという間の58分で、ちょっと時間の経つ早さにびっくりしています。今日はありがとうございました。

1つだけ、ちょっとエピソードというか、ご紹介して今日の（話に）関連する。

実は息子がまだ小学生だった時に町のロボティックス大会に出たのですよ。で、ブロックをお互いの陣地に入れ合ってその速さとか、点数を競うみたいなやつだったのですが、その時すごく驚いたことがあります。

その点数が多い1位、2位、3位が表彰された後にチャレンジ賞だったかな、ユニーク賞だったかなという賞があって、1番人と違う方法でそのブロックを相手の陣地に投げ込んだ人が表彰されるという賞があって。その賞が1番賞状が大きかったのですよ。出物したので賞品も1番豪華だったんですね。みんながえっちらおっちら（持って運んでいた）、っていう中、ボーンって投げていたのですよ。で、投げるので精度が低いのですが、数もスピードも他の人よりちょっと遅かったのですが、その子にチャレンジ賞だかユニーク賞だかっていう賞だったと思うのですが、それが1番大きかったというの、が私は結構衝撃的というか、だったなと思っているのですね。

何を申し上げたいかというと、やはり、もちろん早い人、できる人、うまい人を褒める、褒めたいのは分かりますし、そういう人は、日本の教育だとしてもそこにフォーカスが当たりがちなのだけど、違うアプローチで違う道でそこに行こうとしている子とか、違う方法でどこかに行こうとしている子とか、あるいは先生も含めて、あるいは市の職員の方もそうかもしれません。チャレンジ賞とかユニーク賞とかっていうのが、1・2・3位より大きい賞状みたいな世界っていうのが、できると多分あの全体の文化とかカルチャーっていうのがみんなでそういうこと、そういう人たちをなんか文化が醸成されてすごくなんか変わってくかもしれないな、なんてことをちょっと思い出しながら。皆様のお話をしておりました。

今日はありがとうございました。

藤代市長
（議長）

ありがとうございました。

印西市でも、市役所でもチャレンジ賞を導入したいと思いました。

ありがとうございます。皆さん拍手で小林りん先生を送らせていただければと思います。

今日はありがとうございました。

小林氏 退室（ログアウト）

藤代市長

ということで大分詰め込んだ1時間でしたけれども、あと15分ぐらい

(議長)

時間がありますので、いろいろと今日のいただいたインプット等も踏まえながら、それぞれの教育委員の方々すいません。発言する機会を設けなくて、申し訳なかったのですけれども、今日の講演を踏まえた上で、またその前の岡田課長からの説明も踏まえてですね、それぞれのコメント等々ありましたらお願いできればと思います。

国際教育に一番思いのある長尾委員の方から。

昨日そういう団体で何か出展を一昨日でしたっけ。されていましたよね。無茶ぶりですか。

先にどなたか話せそうな、増田委員どうですか。

増田委員

岡田課長の方から、学校における国際理解教育の推進に係る課題というところで挙げていただいた中に、教職員の意識、それから経験の偏りというところが、本市の課題になっているというところ、そのことを私自分自身も考えながら小林先生のお話を聞いていたときにですね、ややもすると落ち気味になる、自分の苦手意識とか後ろ向きになりそうな指導に対する気持ちみたいなものの克服方法ってありますかっていうのをちょっとお聞きしようかなんていうふうに思ったのですけれども。

いろいろと工夫をしていくことで、指導者側の苦手意識とか克服法っていうのはあるものだなっていうことと、やはり忙しさっていうことで、自分の中に時間的な余裕、考える余裕っていうものをなくしているときには、やっぱり後ろ向きになってしまうっていうところを考えていくと、本当になかなか多忙感の解消に向けた具体的なところっていうのは難しいところもあるのですけれども、そこはこれからも、果敢に取り組んでいかななくてはならない課題だろうなというふうに思いました。

それであともう1つをお聞きしたいというか。

今日ご説明いただいた中で、来年度から小学校の方が18校、特例校になるということで、目指していく、その方向性とか取り組んでいこうという意気込みみたいなものを感じてすばらしい取り組みになるだろうというふうに思うのですが、こちらでいただいた別紙ですね、印西市英語教育ビジョンという中の、小学1年生、小学2年生、ここが週1時間の英語活動とか、英語の指導が入ってくるというところ。この時間というのはどういうところで充てていくものになるのか。

また、各校の実態によるというのは、当然学校規模による、そういった違いというのはもともとに生まれるものだと思うのですけれども、9年間の一貫した指導というのをそれが英語力向上に向けた、小中連携とかっていうこの大きな柱のようなものも立てているところで、各校の実態に合わせるというような取り組みのままでいると、少々学校による温度差とか、取り組みのイメージの違いとか、そうしたものは出てこないのかなっていうようなところを、ちょっと考えました。

そうしたところについて少しご説明いただければと思います。

藤代市長

非常に現場に根差した質問をいただきましたけれども。

(議長) では、指導課長の方から

指導課長 ご質問ありがとうございます。

1年生2年生の英語科、英語学習をするにあたって、生活科を削減する予定です。生活科が年間105時間、週当たり今生活科って1年生で3時間行っているのですが、そのうちの3分の1、1時間を、外国語科に編成して実施しようかなと。こちらには各学校の実態によるとありますが、年間35時間、週1時間の35時間を予定しております。

藤代市長 (議長) 学校ごとの温度差が出ないようにというのは（どうですか）。

指導課長 今、この小学1、2年生も、教育特例校の認定を受けすべての学校で英語学習をするというのは、私も去年、一昨年、現場に行ったときからずっともう教育委員会からの伝達事項としてされておりまして、特例校になる前から、1、2年生で英語活動に取り組んでいる学校も実は特例校として指定を受けて取り組んでいたわけではないのですが、週1時間、取り組んでいる学校なんかもありました。今もあります。

そういったことで、市全体がこういう取り組みをするっていうのは、もうある程度市内の管理職及び学校の小学校の教員は大体こう理解しているところですので、そんなに大きなハードルではないかなというふうには思っています。

藤代市長 (議長) ありがとうございます。
それでは続いてどなたか。それでは長尾委員お願いします。

長尾委員 はい。ありがとうございます。
例えば、先ほどの小林りんさんのお話でもあったように、英語を学ぶ時間ではなくて、例えばその生活の授業を削るのではなく、英語を取り入れて生活科をすとか、体育の時間を英語でやってみるとか、そういう感じで、楽しく英語を取り入れるっていうことは、考えられたりはありますでしょうか。
教えていただければと思います。

指導課長 はい。ご質問ありがとうございます。
あるかないかと言われれば、ありません。
英語を使って何か別の教科を教えるという計画はありませんというのは、そういう指導計画を練ってはおりません。

あくまでも英語学習として、言語に触れる、言語を楽しむ、という年間指導計画を作っておりますので、様々な教科で英語を使いながら教えるという計画は、今現時点では、考えておりません。

以上です。

藤代市長
(議長)
指導課長

やれる余地とかもないですかね。

どうでしょう。

藤代市長
(議長)

多分、実際問題、それが一番身につくのと、日常の会話とかは週1時間もしないです。やったとて、大した力にならないはずなのですよ。僕なりに、いまだに英語は苦手ですけど、海外駐在とか留学をさせていただいた身からすると。であるならば、まだその何かのために、英語を使ってみるという経験の方が効果は数倍変わってくるのだろうなという感じはするのですが、やっぱり今の建付けだとどう調整してもやはり難しいという感じなのですかね。

指導課長

今の時点で、いきなりそこに舵を切るとするのは正直難しいです。

しばらく今作り上げてきたものやってみて、いやいやこれでは、というところがもしかしたら来るかもしれませんし。ただ、その1、2年生で行おうとしている英語というのが、言語を学ぶというよりも、言語に触れる、ちょっとビジョンにも書いてありますけれども、本の読み聞かせだったり、ゲームだったり、歌だったりっていうところなので。

言葉を学習するというよりも、言葉に触れるというかなれるというかそういう学習が中心になりますので、ちょっとシフトチェンジするのはしやすいのかなとは、今、思いました。

藤代市長
(議長)

わかりました。一旦よろしいですか。

私からのお願いとしてあるのだとすれば、少し英語学習という観点での専門家の方々に話を少し聞いていただきたいかなというのがあります。

触れることの大事さは、当然だと思うのですが例えば、週5でインターナショナル、ナーサリーみたいところで触れている子たちと週に1時間の子たちとの差分がある中で、果たして何が一番この公教育において、価値を発揮できるのかというところは、私自身も答えを持ってないですけど、何かしらこう市として、より踏み込んだ方針を、それが教育ビジョンなのだと思うのですが。踏み込んだ考えを持つというのが結構大事なのかなというのはいちよっと思うところではありますので。

他に委員の方々から何かあれば。

よろしいですか。

屋敷委員。

屋敷委員

はい。屋敷です。

私は質問ではなく、今日の講義の中の感想になります。

小林先生のお話を伺って、まず職員室の中から多様性が必要、先生方の環境を整えてから踏み出すことが必要なかなと強く感じました。

前、別のタイトルでもありましたけども、先生方の働く環境を整えるこ

とが何に対しても必要なのかなと感じました。
以上です。

藤代市長
(議長) ありがとうございます。
それではよろしいですか。何か一言もしあれば。

豊田教育長職
務代理者 豊田でございます。
印西市の中の取り組みの中で、最後にちょっと1点ほど質問させていただきたいのですが、この添付の資料を見させていただきますと、小1、小2については読み聞かせですとか、ゲームとか、そういったもので英語に親しむというような内容だと思うのですが、ちょっと具体的にどういうことをされているのか、この他に何かありましたら教えていただければ幸いです。
よろしくお願いします。

指導課長 はい。ご質問ありがとうございます。
内容としましては主にこのビジョン、英語教育ビジョンの1・2年生の欄に書かれていることが主になります。
ただ、小学校の授業1時間は45分なのでありますが、この1・2年生については45分間英語の絵本やゲームや歌遊びをやっているわけではなくて、それを、例えば45分を週2日に2分の1ずつ、短い時間、半分の時間でこういった英語に触れる、だから、必ずしも週1で1コマやっているものではなくて、週2に分けたり、週3コマに分けたりして、やっているというのが低学年の現状です。
以上です。

豊田教育長職
務代理 はい。ありがとうございました。
実際のところ、小学校1・2年生、そういった教育をされていて、やはり少し、手応えというのはもちろんつかまれているのでしょうか。

指導課指導係 ちょっと現時点では、まだ手応えというところでうまく語れる実践例がないのですが、現場の先生方と、もちろん英語教育コーディネーターさんとALTさんと何人かで入ってたくさんの英語のシャワーをこどもたちに浴びせる時間を行ってくださっていると思っております。
また、今後もALT、それからコーディネーター、それから担任の先生方も主となって授業を進めて行ってもらう予定です。

豊田教育長職
務代理者 はい。どうもありがとうございました。
藤代市長 よろしくお願いします。
はい。ありがとうございます。

(議長) では、最後教育長と私とそれぞれ一言ずつで締めましょうか。

渡邊教育長 はい。

今日の講演を聞き、また今様々な質問に対するお答え等も多く聞きながらですね、現場のやっぱり先生方を我々がどう支えていくか、いろんな新しいことも含めて、先生方が学ぶ機会というものを、どう我々が設定していくか、そのようなことと、また管理職と連携をしながら、その辺の意識を醸成していく、このことが大事なのかなということを今思っています。
以上です。

藤代市長 ありがとうございます。

(議長) 今日はもともとは、事務局の想定としては、国際理解教育とか、その多様性の中で子どもたちの力をどう育んでいくか、という文脈の話が聞ければよかったという話であったのですが、どちらかというと、日本の公教育と、I S A Kさん含めて世界で展開されている教育を比較する中で日本の教育をよりよいものにしていくためにはどうしたらいいかという視点でのアドバイスをいただけたのかなと思っています。

いろいろと指摘される方もいますけど、私はやはり日本の公教育にすごく大きな可能性を感じているので、それはもうやはりそうなのだなというのを改めて今日確信を持ったところがあります。

あと、やはり先生方というのは、子どもたちにすごく向き合ってくださっている方が多いので、その先生方がちゃんと前を向いて働くような環境を作っていくということが、やはり大事なのだなというのを改めて確信を持ったところですね。

それに加えて今後、さらに検討していくというところで言うとやはり国際理解という文脈で市がどうしていったらいいのか、あとは英語教育ですよね、英語教育について、市として公教育はどうあったらいいのか。

あともう1つ、海外の方、海外からいらっしゃった皆さんも今増えている中でもありますので、おそらくこれからさらに増えてくのだと思います。そういった子どもたちがいる環境の中でどのように教育の場を組み立てていくのか、このあたりは論点として残っているのかなと思いますので、総合教育会議の場に有識者を呼ばない形でもいいと思いますので、少しそういった専門の方々にお話を伺うようにして、私たちなりの考えを深めていくことが大事なのかなと思ったところでもあります。

というところで、今日は若干特殊な座組での、展開となってしまったのでなかなか皆さんの発言の時間も制限されてしまって申し訳なかったのですが、しっかりと今回の学びを生かしながら私達としても取り組むビジョンをさらに作り上げていければと思ったところでもあります。

それでは一旦議題は以上となりますので事務局の方に進行を開始したいと思います。

企画政策課長 はい。ありがとうございました。

(進行)

なお、本日の会議に関するアンケートにご協力をお願いいたします。

Y o u T u b e 配信をご覧の皆様には、概要欄にリンクがございますので、そちらからご回答ください。よろしくお願いいたします。

それでは以上をもちまして、令和7年度第7回印西市総合教育会議を閉会いたします。

お疲れ様でした。

(午後3時20分)

印西市総合教育会議設置要綱第8条の規定により、上記会議録は、事実と相違ないことをここに承認する。

令和7年11月30日

印西市教育委員会委員

屋敷 毅